



# 明治大学 黒耀石研究センター ニュースレター

No. 24

March 2026

Center for Obsidian and Lithic Studies Newsletter

## 国際発信

### チェコ科学アカデミーでの国際講演

黒耀石研究センター長 藤山龍造

2025年10月30日、チェコ共和国の首都プラハにて、チェコ科学アカデミー（Czech Academy of Sciences, CAS）からの招待を受けて講演を行いました。CASは同国最大の非大学研究機関で、50を超える研究所を擁するヨーロッパ有数の学術組織です。自然科学から人文社会科学まで幅広い分野をカバーし、なかには大規模な考古学研究所も含まれます。

極東地域の先史文化、とりわけ土器の起源と拡散に関する研究は近年国際的な注目を集め、今回の講演にも大きな期待が寄せられました。

講演テーマは“Between subarctic and subtropical zones: How did hunter-gatherers in the Far East adopt ceramic technology during the Late Pleistocene?”. 亜寒帯から亜熱帯まで多様な環境が凝縮された日本列島を舞台に、狩猟採集社会がどのように土器を受容し、どのような過程でそれを広域に拡散させていったのか、その背景にある環境的・社会的要因を紹介しました。標高3000メートル級の山岳地帯から低平な沿岸部まで、驚くほど多様な景観が近接する日本列島では、長年にわたり膨大な数の遺跡が継続的に

## 目次 Contents

*国際発信	1
*海外調査・研究推進	2
*研究推進・教育との連携	3
*社会貢献・地域連携・普及啓発	4
*新刊紹介	5

調査されてきました。この蓄積は、世界的な議論に対して日本考古学が提供できる大きなアドバンテージであり、単なる地域研究の枠を超えた国際的貢献の可能性を示しています。

当日はCASの研究者に加えカレル大学の学生も対面とオンラインの双方で参加、活発な質疑応答が行われました。日本列島のデータが国際的な比較研究のなかでどう位置づけられるのか、多くの参加者が強い関心を示し、議論は予定時間を大きく超えて続きました。また講演後には、研究者同士の交流の場が設けられ、今後の共同研究の可能性や、学生を含めた学術交流の拡大にも意見交換が行われるなど、非常に実りある機会となりました。

ありがたいことに、来年度以降も国際シンポジウムや講演の機会を複数いただいています。今後も「日本の歴史資源を世界に活かす」をキーワードに、研究と発信を一層進め、国際的な学術ネットワークの中で日本考古学の存在感を高めていく所存です。



写真1 プラハ城とCAS考古学研究所（右）



写真2 講演会の風景

## 台湾八仙洞遺跡の海外調査と学术交流

客員研究員 諏訪問順

### 1 八仙洞遺跡へ

2026年1月31日、黒耀石研究センターの堤隆特任教授とともに、台湾を訪れた。目的は八仙洞遺跡の踏査と、国立台湾史前文化博物館での同遺跡石器群の観察である。空港では、同館の研究員で東京大学大学院博士課程において八仙洞遺跡をテーマに研究を進める曾于宣さんに出迎えいただき、車で八仙洞遺跡に向かった。

八仙洞は、波の浸食によって形づくられた海食群で、約3万～1万5千年前の後期旧石器時代の台湾を代表する遺跡である。標高の異なる洞窟が段状に並び、地殻隆起によって次第に海面上へ現れてきたという。近年の研究では、千年で約5.8メートルという隆起速度が推定されており、この地がいまなお動き続ける大地の上にあることを知る。

### 2 長濱文化の礫器インダストリー

八仙洞は、台湾唯一の旧石器遺跡であり、切り立った断崖に、8か所の旧石器洞窟が確認されている（曾 2024）。



図1 八仙洞遺跡 筆者と曾研究員

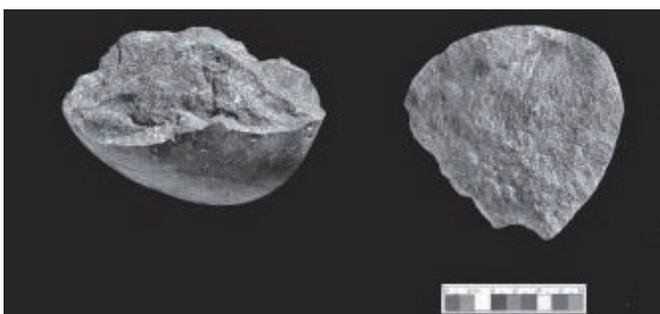


図2 長濱文化の礫器（曾 2024）

順番に回った洞窟には、逆V字型の尖ったタイプと半円形のドーム形の2種類があることを知った。

八仙洞の旧石器は、礫器インダストリーで、片面を打ち欠いて作るチョッパーや剥片石器は、海浜礫の自然な形を活かした素朴な技術が特徴である。実際、洞穴群の前面の海岸にも降り立ち、石器の素材礫を確認した。海岸には丸みを帯びた礫が無数に広がっており、その多くは変成砂岩であり、長濱文化と呼ばれる台湾最古級の石器文化は、こうした海浜礫を石材として使われていることが良く理解できた。

長濱文化の起源については、大陸起源説と南方起源説があり、台湾は人類移動の接点であった。道中、三万年前航海再現プロジェクトの出航地である烏石鼻海岸に立ち寄った。黒潮が北上する外洋を前にすると、沖縄の旧石器文化との関係が自然と思い浮かぶ。

なお、八仙洞では旧石器時代だけでなく、その後の先土器時代の文化層も確認されているが、両時代間には時間的な間隙がある。その潮音洞文化も礫器インダストリーで、台湾では伝統的な礫器インダストリーが長い時代にわたって続くようである。

### 3 国立台湾史前文化博物館

2月1日、台東市内の国立台湾史前文化博物館を見学、翌2日、台湾原住民の研究者である蔡政良館長にご挨拶し、収蔵庫で姚研究員のご配慮のもと八仙洞出土石器群を観察する機会を得た。2023年に大規模リニューアルを終えた展示は、台湾の先史文化を海洋ネットワークの視点から再構成している。収蔵庫は完全空調のもと資料のデジタル化が進められていた。

今回の調査で、多大なご尽力をいただいた曾于宣さんに深い感謝とともに、台湾旧石器研究のさらなる進展を心より祈念したい。

#### 参考文献

- 曾 于宣 2024「台湾八仙洞遺跡における新発見—後期旧石器時代から先土器時代まで」『東南アジア考古学』43号  
李 作婷 2024「台湾旧石器文化の起源を探る—長濱文化の石器技術と古人類—」『九州旧石器』28号



曾 論文



李 論文

二つの論文のダウンロード QR コード

## 研究推進

### 『資源環境と人類 2025 シンポジウム』開催

2026年新春の1月24日(土)・25日(日)、「草創期石器群から人類行動の多様性と広域性に迫る」と題した『資源環境と人類 2025 シンポジウム』がグローバルフロントで開催され、両日約80名の参加があった。センターでは、池谷特任教授や中村由克客員研究員、橋詰潤元特任准教授らが主体となって、長野県・岡谷丸山遺跡の縄文時代草創期の石器群の究明を進め、研究報告を刊行したが、その成果に基づいての今回のシンポジウムとなった。

当日は、背景にある気候環境や初期定住の過程にも目が向けられ、縄文時代成立期における人類行動の多様性と広域性について議論が大いに深まった。

予稿集は、明治大学黒曜石研究センターのホームページからダウンロードできる。

## 教育との連携

### 第8回 COLS 考古学フォーラム 開催

2026年2月21日第8回COLS考古学フォーラムが、明治大学リバティータワーで開催された。

午前の部では、押圧剥離の実験考古学ワークショップが開催され、10～20代の専攻生から、70代の一般の方まで28名が参加、黒曜石や珪質頁岩の押圧剥離にチャレンジした。ゲスト製作者は、石器実験製作の第一人者大場正善さんと金彦中さん。考古学専攻生では、愛知学院・南山・早稲田・大正・都立大学そして明治大学と多くの学生が参加し、良い教育実践の場となった。

午後は、第5回八ヶ岳あおば旧石器文化賞授賞の東北大学大学院の吉田真優さんの「石英製石器の使用痕分析—その意義と方法的課題への挑戦—」、明治大学4年の高草木和佳子さんの「ナイフ形石器終末期における石器群の多様性とその背景 - 相模野台地を対象とした石器製作の遺跡間連鎖を通じて -」と題した2つのフレッシュな研究発表の発表があった。

最後に明治大学黒曜石研究センター元センター長小野昭先生の「異質で不連続な現象に出会うとき新たな発想が生まれる」と題した講演があり、今年80歳となられた小野先生が熟練の研究過程で生じた2つの新たな発想について触られた。参加者は一般も含めて70名、わけでも専攻生は、研究の発想をどのように得ていくかという大きなヒントが得られたかと思う。

### 石器石材研修 2026 野尻湖の開催

COLSの中村由克客員研究員による「石器石材研修」が、2月28日～3月2日、長野県信濃町の野尻湖ナウマンゾウ博物館で行われた。明治大学も含め、首都圏、中京圏などから13名の大学生・大学院生らが参加、合宿形式で3日間にわたり石材研究の基礎と実践に向き合った。

中村客員研究員はこれまで、黒曜石・晶子形態法、安山岩・帯磁率原産地推定法のほか、顕微鏡観察を軸とした石材産地推定の高精度化に取り組んできた。今回の研修では、その蓄積をもとに、石材観察の基本と応用について、レクチャーがなされた。

こうした研修は、次世代の研究者が確かな技術を身につけ、自らの研究を切り拓くための重要な出発点となり、多くの若手によって継承されることが期待される。

(堤 隆)



図1 『資源環境と人類 2025 シンポジウム』での討論



図2 中村客員研究員を講師とした石器石材研修

## 香坂山遺跡の国史跡指定と佐久市表彰

2025年9月18日、長野県佐久市の香坂山遺跡が2020年の学術調査から僅か5年という異例のスピードで国史跡に指定された。

この遺跡は、1997年に調査され、旧石器時代の遺物などが出土していたが、人類の日本列島への進出ルート解明を目指していた、奈良国立文化財研究所の国武貞克氏がこの石器に再注目して学術調査を実施。その結果、AT層の下から膨大な遺物、特に大陸との繋がりが想定可能な大型石刃、小石刃、尖頭形剥片が出土し、さらに約36,800年前という放射性炭素年代測定から、日本列島最古の石刃遺跡であることが判明したのである。

COLSでは、この調査・研究に2020年より特に佐久市と縁の深い須藤隆司客員研究員、堤隆特任教授の両名が全面的に協力した。この業績が称えられ国武氏と須藤・堤両名に佐久市長から表彰がなされた。

## シンポジウム『香坂山遺跡からさぐる日本列島現生人類の起源』の開催

香坂山の国指定を記念して、2025年11月15日・16日の2日間に渡り、シンポジウム『香坂山遺跡からさぐる日本列島 現生人類の起源』が佐久市市民創錬センターにて、長野県考古学会主催、明治大学黒曜石研究センターほか共催で実施された。当日は、150名を超える市民・研究者で会場は熱気をおびた。

日本の人類学・旧石器考古学をリードする研究者が登壇し、COLSからは池谷信之副センター長、堤特任教授、須



図1 香坂山遺跡調査風景

藤客員研究員がそれぞれ発表を行なった。また、国武氏は一連の調査の成果と意義を熱く語り、聴衆にその重要性を伝えた。

## 神津島産黒曜石の発見と地域フォーラム

25年11月、明治大学黒曜石研究センター藤森英二補助研究員の長和分室蛍光X線装置での原産地分析によって、佐久市寺畑遺跡の縄文草創期爪形文期（約13,000年前）の石器の中に、神津島産黒曜石の搔器1点が含まれていることが判明した。

この重要な分析結果を周知するため、当センターは佐久市と共同記者会見を行い、そのニュースは新聞やテレビを通じて広く報道された。そもそも神津姓の多い佐久市は、1994年から東京都神津島村と友好都市関係にあり、1万年を遡る両自治体の交流としてもたいへん大きな話題となった。

柳田清二佐久市長は、その重要性に注目され、年明け早々の2026年1月17日に、柳田佐久市長・神津教育長・清水議会議員・佐久市文化財事務所職員が神津島産黒曜石の搔器を持参、堤特任教授も随行し、翌18日に神津島村生きがいセンターで神津島産黒曜石出土報告会がなされた。

神津島村からは前田村長・桜井副村長・清水教育長・石田村議会議員をはじめ全議員、大人から子どもまでたくさんの村民がこの報告会に参加し、さらに盛り上がりを見せた。

翌2月には、センター主催、佐久市共催でCOLS考古学フォーラムの神津島産黒曜石報告会が佐久市穂乃香ホール開催され、柳田佐久市長の挨拶の後、佐久市の松下学芸員と藤森、池谷特任教授が報告に立った。会場は180名の参加で満席となり、市民の関心の高さがうかがえた。

佐久市での香坂山遺跡の調査や神津島産黒曜石の発見は、当センターの大きな地域貢献および市民への普及啓発になったと考える。

(藤森英二)



図2 発見された神津島産黒曜石の搔器

Yaroslav Kuzmin 著 2024  
 “Across the Seas in Prehistoric Northeast Asia:  
 Obsidian as a Commodity for the Study of Human Migrations”  
 評者 池谷信之

## 1 はじめに

前号 (No. 23) では、第 6 章「Obsidian sourcing in the Japanese Islands」(日本列島における黒曜石の原産地推定) について紹介した。今回は第 4 章「Obsidian sourcing in Southern Russia Far East」(極東ロシア南部における黒曜石の供給) について述べていく。この地域はロシア沿海州・アムール川流域・樺太島・千島列島・オホーツク海北部沿岸・カムチャッカ半島からなり、著者クズミンの本来のフィールドでもある。

## 2 ロシア極東地域における黒曜石の供給

ロシア沿海州地方 (Primorye) クズミン自身が分析に関わった遺跡が含まれ、ロシア極東で最もよく研究されている地域でもある。

この地方の南部 (ウラジオストック北北東約 80km) には玄武岩台地 (Basaltic plateau) が広がっており (図 1)、玄武岩—玄武岩質安山岩に由来する火山ガラスを生成する。化学組成からみれば、この石材は厳密には無斑晶質玄武岩とすべきであろうが、ロシアの研究者も黒曜石

(obsidian) と呼んでいるとのことである。この玄武岩台地 (Basaltic plateau) の成立年代は 13.8 ~ 12.7Ma であり、台地の名称をとって「プリモリエ玄武岩台地 (Primorye Basaltic plateau)」と呼ばれている。黒曜石原石はこの台地から水磨されながら河川に流入しており、露頭から約 20km 離れた位置でも 15 ~ 20 センチのサイズを保持しているという。

いっぽう沿海州 (Primorye) に供給される黒曜石は、PNK1 (白頭山黒曜石原産地の一つ) と地元の Primorye Basaltic plateau が主体となっているという。

さらに最近になって中国北東部から北朝鮮国境に近い場所で「グラッドカヤ (Gladkaya)」と呼ばれる小規模な流紋岩質黒曜石の供給源が確認された。小規模というものの、この原産地の後期旧石器時代~新石器時代の供給範囲は 160km ~ 350km に及んでいる。

**アムール川流域** アムール川流域はロシア極東でも最も研究が遅れている地域であり、遺跡から発見される黒曜石も他の地域に比べて少ない。この地方ではアムール川中流域に「オブルキエ (Obuchie) 台地」という黒曜石原産地がある (図 1)。やはり玄武岩—安山岩質の火山ガラスとして存在し、その年代は 22.6 - 18.6Ma. まで遡る。ただし、周辺遺跡の調査事例が少ないこともあり、その流通範囲はよくわかっていない。

いっぽう、この地域に運び込まれている黒曜石は、地元のオブルキエのほか、北海道白滝 A (同定数は 5 サンプル)、プリモリエ玄武岩台地、アムール川の東側の「サマルガ (Samaruga)」原産地 (露頭の位置は不明。) などである (図 1)。

白滝原産地から同産地の黒曜石が出土したアムール川下流までは直線で 900km あまりであるが、実際には白滝原産地から宗谷海峡を越えて樺太島に運ばれ、その北端からさらにタートル海峡を横断したとすると、その移動距離は 1,000km 以上に及ぶ。これはロシア極東において最も長距離を黒曜石が運搬された事例となる。

**樺太 (Sakhalin) 島** 樺太はロシア極東で最大の島であるが、これまでのところ黒曜石原産地は発見されていない。したがって南部を中心としながらも、島全体に北海道産の黒曜石が展開している (図 1)。

クズミンによれば、この地域の後期旧石器時代遺跡 10 か所、新石器時代遺跡 28 か所、古期金属器時代遺跡 7 か所から出土した黒曜石計 206 点の原産地推定が行われているという。そのうち白滝産 (A・B のどちらか、あるいは両方) が含まれていた遺跡は 81% に達し、置戸所山産も 35% が含まれていた。また赤井川産が発見された遺跡

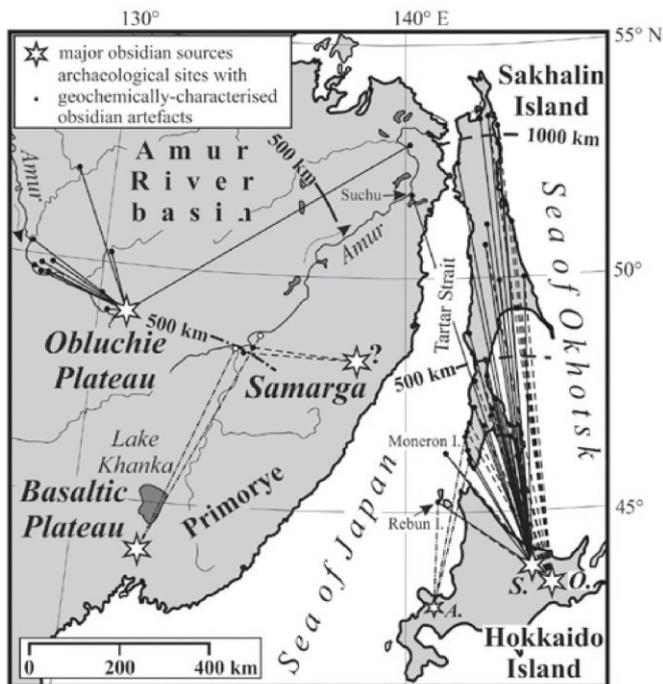


図 1 (本書図 4. 7) アムール川流域と樺太島における異なる産地からの黒曜石の分布。略語 S.: 白滝, O.: 置戸, A.: 赤井川

はごくわずかに留まる。

千島 (Kurile) 列島 ここにも黒曜石原産地は知られておらず、新石器時代以降は、千島列島南部は白滝 (A・B) 原産地や置戸 (所山・置戸山) 原産地から、列島北部はカムチャッカ半島南部の KAM-01・KAM-02・KAM-04・KAM-05 の各原産地からの供給を受けている (図2)。

図2に示されたように、白滝産黒曜石の供給の北限はシムシャー (Simushir) 島 (図1・S)、置戸産黒曜石の供給の北限はさらに北側のプラムシャー (Pramushir) 島まで伸びている (図1・O)。逆にカムチャッカの諸産地の南限は国後 (Kunashir) 島となっている (図1・Kam.)。

このように国後島がカムチャッカ産黒曜石の南限となっているのは、多分に現在の日露の「国境」が影響している可能性がある。北海道オホーツク海沿岸の縄文～擦文期における原産地推定結果で、「推定不可」ないし「産地不明」とされた資料のなかに、カムチャッカ産黒曜石が含まれていることを否定できない。千島列島南部には北海道島と同様に、続縄文文化やオホーツク文化が展開しているのだから。

評者である池谷は、これらの原産地の化学組成データセットを入手して、過去の原産地推定を再検証する必要を強く感じている。

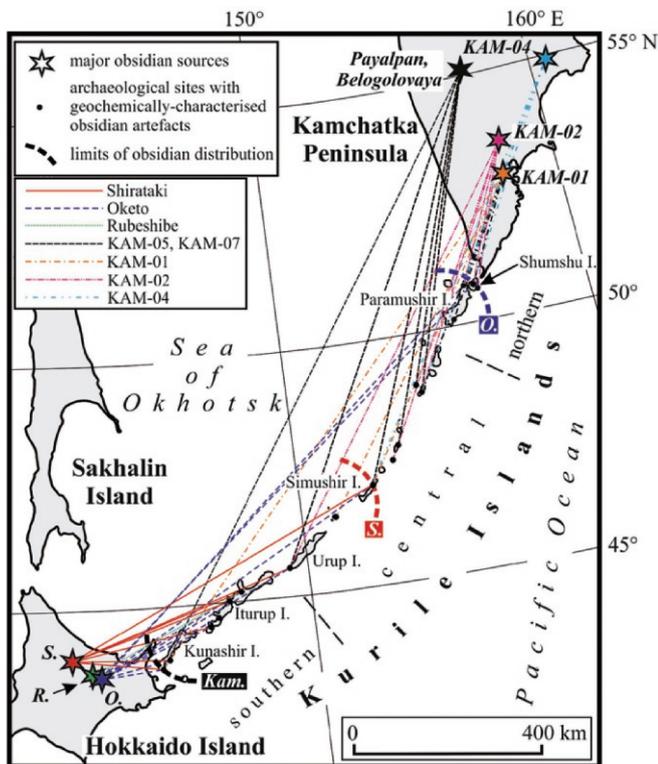


図2 (本書図4.8) 千島列島におけるカムチャッカ半島と北海道島原産地からの黒曜石の運搬状況。略語 S.:白滝, O.:置戸, R.:ルベシベ, Kam:カムチャッカ

## 第1回 COLS 考古学フォーラム開催のお知らせ

明治大学黒曜石研究センターの2026年度第1回の考古学フォーラムは、本学考古学専攻卒業で、多数の著書のある勅使河原彰さん(縄文考古学者)のご講演で、以下のとおり行います。ぜひ、ご参加下さい。

このフォーラムは、長野県考古学会と共同で行うもので、藤森栄一賞50回を記念して行われます。

勅使河原さんは長野県考古学会から第13回藤森栄一賞を授与されており、考古学者藤森栄一の考古学にも造詣が深い方で、また縄文時代研究者であることから、今日的な話題の植物考古学や縄文農耕論についてもお話しされます。

### 第1回 COLS 考古学フォーラムの概要

日時 2026年4月19日(日) 14:00~15:30

場所 明治大学 グローバルフロント 4021 教室

講師 勅使河原彰さん

演題 植物考古学と先史考古学の役割

—藤森栄一の縄文農耕論を題材に—

参加 申込み不要・参加自由(教室定員100名先着)



### ■ オススメ図書

勅使河原彰さんの著書で、縄文時代のビジュアルなガイドブックです。ロングセラーで、縄文時代を基礎から学びたい方は、ぜひ!

A6版 96頁

1500円+税

2013年 新泉社刊

### 明治大学黒曜石研究センターニュースレター 第24号

発行日:2026年3月20日

編集・発行:明治大学黒曜石研究センター 猿楽町本部  
〒101-8301 東京都千代田区神田猿楽町1-6-3  
電話:03-3296-4424

黒曜石研究センター 長和分室  
〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8  
電話:0268-41-8815  
URL: <http://www.meiji.ac.jp/cols/>

印刷:株式会社丸井工文社  
〒108-0073  
東京都港区三田3-11-36  
電話:03-5464-7111



\*当センターでは施設の固有名称として「黒曜石」の表記を使用しています。